

五木寛之作品集

23

五木寛之作品集

23



文藝春秋



五木寛之作品集 23

地図のない旅

1974年6月20日第1刷

著者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製函／株式会社加藤製函所

製本／大口製本印刷株式会社

© 1974 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第二十三巻／目次

地図のない旅

犬のいる風景	9
夜の蹄の音	12
夜の中を車で走るとき	15
果して夜は明けるのか	20
深夜に目覚めて	25
デラシネと古典落語	31
アメリカ人との関係	33
女が男をみつめる時	39
ブブノワ先生のこと	44
母親の中の女	47

ある時代の終り	1
ある時代の終り	2
雪の中の凍った本	64
ナマそばとキ・ビール	69
肩書きのない名刺	74
過去への遁走曲	79
マリー・ラフォレ	85
ブラハの目抜き通りで	88
幻想のバリ祭	93
冬宮広場にて	99

ヨーロッパ軽薄日記

セクサスの作者

故郷に女ありて

新 潟

金 沢

博 多

札 幌

神 戸

沖 縄

長 崎

秋 田

広 島

大 阪

102

109

113

115

121

127

136

145

153

161

170

173

187

徳 島

京 都

宮 崎

松 江

姫 路

総 集 編

ある日 日本の片隅で

男の子と女の子

深夜のスタジオの物語

イージー・ライター

黒い円い世界

ヒットラーの怖れたもの

国家と民族の重い壁 私の中の日本国

194

202

210

217

223

231

239

241

246

251

257

262

268

人間嫌いの果てに

273

津軽漂流記

279

殴られに行く

297

青春の碑文

309

帰って来たバイオニア

311

昼顔の店

313

くぼんだ世界香港にて

316

解説 日野啓三

321

地
図
の
な
い
旅

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチユアル
表紙・扉カット／エドワルド・ムンク
「叫び」より

地図のない旅

犬のいる風景

犬に階級的偏見があることを発見したのは、最近の大きな収穫であった。

私の家には妙な犬が一匹いて、この犬の習性をじっと観察していると思いがけない、いろんな発見があつて面白い。犬の階級的偏見というやつもそのひとつである。

犬の名前は、バビーという。ラテン語のバビルスからとつた、というのは嘘であつて、何でもいいから呼びやすい音をつくつただけである。白い、薄よごれた小型犬で、とばけた愛嬌のあるつら構えをしている。手入れ

をしないためか、頭からしっぽまであちこちに毛玉ができて、すこぶる珍なる風情だ。風呂にでも入れて洗つてやればいいのだが、そうはいかぬ。なにしろ飼主の私自身がもう半年ちかく頭を洗つたことがないのに、犬だけ洗うというのも筋の通らない話ではないか。したがつて名犬バビーも永久にフェルト状の塊のままだ。

この犬が客好きで、玄関にベルの音がすると、足がもつれそうに喜んで飛んで行く。そして客の足もとにじゃれたり、妙な甘え声を立てたりして、接待に相勤めている。それはいいのだが、客の職業によってその応対がちがうので困ってしまうのだ。

ネクタイをしめている客だと、しっぽを振つて大歓迎である。これがジャンパー姿に下駄ばきだったり、ガス工事の職人さんだったりすると低い唸^{うなり}り声を立てながら、上目づかいにあとずさりしたりする。一体に頭脳労働者に対しては低姿勢で、筋肉労働者に向つては態度がよろしくないようだ。ブルジョア風の客に対して好意的であり、勤労階級に向つて敵意を示すというのは、これは革命的であり、保守反動以外の何ものでもあるまい。

「犬はその家の飼い主に似るといふが、おれたちは来客をその属する階級によって差別したことがあるだろうか」

と、過日、思い余つて私は配偶者にたずねてみた。

「そんなことはないでしょう。最近はお前もつてきてくれる人とか、工事の職人さんなんかには、もう、可能な限りの丁寧な態度で接しているはずだわ、あたしたち」

「しかし、表面的にはそのように対していても、内心ではチェッと思つてゐるとか——」

「どういたしまして。あたしがチェッと思ふのはネクタイをしめた紳士ふうの人に多いわ。あなたこそプロレタリアートに対して隠された偏見をいだいてらっしゃるんじゃないの？」

「じゃあ、うちの犬の態度が客の風態によつて違ふといふのは、一体どういうわけなんだ」

「そんなことあたしにおききになつても無理よ。あたしは犬じゃないんですもの」

「しかし——」

「しかし、何ですか」

真実を語ることは時として家庭の平和に対する重大な危機となることもありうる。私は口の中でつぶやきかけた言葉をあわてて飲み込んでしまった。

本当のことをいおう。諸君、細君というやつは実は犬なのだ。いや、犬ではないが犬に似た存在らしいのである。私はその事実をある同年輩の小説家に知らされたばかりなのであつた。

その小説家は、無口な男である。無口であるから時たまもらす言葉が千鈞の重みを持つといふのも理の当然だ。九州の田舎では、男は日に三言、などというではないか。その彼、曰く。

「細君というのは犬に似てゐるな」

「なぜ？」

「ほら、やたらと主人と遊びたがるじゃないか」

「うゝむ。なるほど」

この感じがわかる男は恋愛結婚、もしくはうんと若い細君をもらつてゐる人物であろう。学生結婚、職場結婚をなさつた方なら、なおよく理解できるかもしれない。

私は私の配偶者と同じ教室で学んだ過去を持っている。したがって遊ぶ時も一緒だった。彼女は私が麻雀^{アソヤン}をやる時はノコノコついてきて仲間に加わり、私が競馬^{アソヤン}にこり出すとたちまち私以上に熱中するようになった。私の友人は、ほとんど彼女の友人でもあり、私がアルバイトで苦しんでいる時は、彼女が半分手伝ってくれたりもした。映画も一緒に見たし、マンボも踊った。質屋^{アソヤン}へも一緒に行き、デモにも加わった。酒は私より強く、私のはじめて日本脱出^{アソヤン}を企てた時も、なぜか一緒にいた。

したがって、世の細君^{アソヤン}がたのように、主人が何か楽しくやっているのを独り時計^{アソヤン}をながめつつ、レースを編んではほどこき、ほどこきでは編み^{アソヤン}して待ちわびるという習慣がない。そんなふうだから、いつまでも主人から乳離れしないのである。すなわち、とかく主人と遊びたがる、のである。

女房は犬に似ている、というのはその所を実にうまくユーモラスに表現している名言だと思うのだ。もし思わないとすれば、それは猫に似た夫人をお持ちの方であろう。犬は主人につくが、猫は家につくものなのである。

亭主^{アソヤン}が家出をしてしまっても、でんと家に居すわっているタイプのヨメさんがいるものだ。私はどちらかといえば、一緒に家出をしてくれる犬型のほうに親しみを感^{アソヤン}じているのだが。

ネクタイをしめていない種族で、私のところの犬に尊敬される唯一の存在が編集者である。締切りの迫っている担当者ほど、バビーは丁重に對しているようだ。もうとつくに締切りを過ぎ、印刷所から直行してくる編集者ともなると、犬も非常に細かく神経をつかつて對しているのがわかる。

まず原稿^{アソヤン}がおくれているわけを私が説明する。隣で目を伏せて、犬、ではない配偶者が頭をさげている。その横で尾をたれ、耳をつばめてうつぶわいているのがわが愛しの名犬バビーである。昨日など、ふとふり返ると、たしかにそのつばらな目に涙さえ浮べていた。

どうやら犬には偏見もあるが、想像力もそなわっているらしい。この原稿の出来具合を、いま横で心配そうに二匹^{アソヤン}がながめている。

へ一九七一年一月

夜の蹄ひづめの音

自分に果して「青春」と呼ぶにあたいる時代があらうだろうか、と独り夜半に考えてみることもある。
「青春」という言葉につきまとう爽やかな感じや、美しいイメージは、私の場合、思い返してみても一向に記憶の底から浮び上ってこないのだ。

昭和二十七年に上京してからの六年間の大学生活が、しいて言えばそれに当るのだらう。だが、もし今、もう一度あの頃の自分に返してやろうと悪魔から言われても私は首を振って断るにちがいない。と言って、現在がそれほど気に入っているわけでもない。ただ人並みに青春

を回顧するには、私たちの世代はいささか心情的に乾き過ぎていただけの話だ。

とは言うものの、それが過去への感傷とわかっていながら、同世代の友人たちとその時代の想い出を語りあうことも時にはある。

私たちの仲間の話題に、よく登場してくるいくつかの共通の単語、それがふと過ぎ去った一つの時代の匂いや感じを強烈に一瞬よみがえらせるとき、みんなは何となく遠くをみつめるような目をして黙り込むようだ。

例えば、「外食券食堂」という言葉。

正月の三吉日、ほとんどの商店が店をしめている中で、この簡易食堂だけは休まないでやっていた。いろんな事情で帰省できない貧しい学生たちや、部屋住みの安月給取りの青年たちが、何となく冴えない顔をつきあわせて正月の外食券食堂に坐って飯を食っている風景を、私は時どきふっと思ひ出すことがある。

中には、赤ん坊を背負った母親と、子供を左右に坐らせた瘦せた父親の一家族が、食堂の隅のテーブルに揃って正月の朝飯を食っている姿なども見かけた。

この食堂で使われる外食券を、早稲田の学生食堂のレジで売ると、いくばくかの現金にかわった。あれは当然、食管法違反だったのだろうが、そんなことはどうでもよかったのだ。私たちは外食券を売った金でジャム付きのコッペパンを齧ったり、コロッケをはさんだ食パンを両手で大切にいかえてかぶりついたりして生きていた。

そんな生活の中で、どうしてそれが可能であったのか不思議でならないが、私たちは時として女を買い、酒を飲んだりもした。その当時、全国の赤線、青線地帯をくまなく紹介した貴重な本があり、その土地の由来から現状、単価から人数までを克明に記載してあって、非常に役立ったものだ。残念ながらその本を途中で失くしてしまつて手もとにないが、あの本が手に入ったらもう一度よみ返してみたいような気がしてならない。

今でもそうだが、私には現実、ありのままの現実というものを信じない傾向があつて、現実よりも夢の中で作りあげた非現実の世界を愛好する気持が強い。現実なんぞない、人間にとって確に存在するのは、自分が創り出した夢の世界だけだと、当時から考えていた。キリコ

の絵だとか、ムンクの石版画などを好むのも、そういう傾向からだろう。

と、いうわけで、私は北千住とか、立石とか、北品川、武蔵新田とかいった場末の娼家の暗い部屋で、いつこうに帰つてこない東北出身の女のベタベタと引きずるようなスリッパの音を待ちながら、ロシア世紀末作家たちの小説を拾ひ読みしたりすることに一種の楽しみを見出していた。

実際、そんな場所で読むにふさわしい小説というのは、確にあるものである。私はヘカスバの女だとか、〈長崎ブルース〉だとか言つた流行歌を、蒲田や川崎あたりのちょっと荒っぽいスタンド酒場で聞いてひどく気に入つて、そのレコードを買つてきて家のステレオにかけて、正坐して聞いてみると全く心にうったえかけてくるものがないことを発見するといった経験が、しばしばある。

それと同じことで、例えば夢野久作の〈氷の涯〉などという小説は、やはり書齋で立派な皮張りの椅子に坐つて読んだりするより、お化け煙突が、巨大なノッペラボ

ウの悪魔の男根のように空に突き立っている北千住の裏町の小部屋で、女を待ちながら読んだほうが面白いと思うのだ。アルツイバーシェフとか、ブーニンとか、クプリーンだとか、それにやはりドストエフスキイなども、そのほうがびったりくるのではあるまいか。

そんなわけで、いま考えてみると、やはりそれが「青春」の気取りには違いないが、何冊かの古本をボケットに突っ込んで、女を買いに出かけた。その頃のことを、いつかは一冊の本にまとまるように書いてみたいような気がする。人並みな「青春」ではなかったが、やはり自分にも自分なりの「青春」があったと言えるかも知れない。

私にとって、むしろ本当に「青春」らしい時期は、年齢的に三十歳を越して、すでに中年に踏み込んだころ、シベリア経由で北欧に飛び出した昭和四十年の夏にあったのではないかと思うことがある。

その当時のことは、これまでもいくつか小説の形で書いている。あれは思えば失われた「青春」への挽歌の一種のような気もしないではない。

上京して大学に入った年、私は血のメーデー事件で、警官隊が実際に拳銃を民衆に向けて発砲するさまをこの目で見た。そして、今でいう内ゲバで、実力査問にかけられた女子学生が、破れた下着姿で文学部の地下室から出てくる姿なども見た。そんな時代に私の「青春」は幕をあげ、そして、ひどく重苦しいものが絶えずつきまとっていたのである。思い返すたびに、心臓が圧しつけられるようないやな感じがこみあげてきて、うんとユートラスに語るか、さりとて抒情的にスケッチしてみせるかし、その時代を語るすがみつからない。

だが、いずれは物書きとして、その重苦しいものの正体を、はつきり直視しなければならなくなる時期が必ずくるだろう。夜半、ふと目覚めて遠くに馬の駆けるひづめの音のような音を聞くことがある。自分の心臓の音かも知れないし、幻聴かも知れない。だが、私にはそれが私の記憶からよみがえってこようとしているあの時代の重苦しい足音のような気がしてならないのだ。

へ一九六九年二月